

チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝



相談・支援活動より

夏

○3歳児検診で「発達障害の疑いあり」といわれた保護者への支援

- ・保健師と情報交換しながら、保護者を支える。
- ・対象児の実態把握をもとに、「個別の指導計画」を作成し、当面の目標を設定するとともに、保護者と支援内容・方法を共有する。期間を設けて指導し、対象児の変容を保護者と一緒に評価して、次の一手を検討する。

○障害のある子どもをもつ保護者の言葉

- ・保護者は信頼できる先生の話であれば聞き入れることができる。
- ・私が10人の障害児の支援者になれば、自分の子どもを支援してくれる人が10人増えるはず。
- ・何度も近所の人に縋出で探してもらったことがある。我が子は地域の人たちに支えられている。私も地域で暮らす我が子を支える支援者の一人である。

○学級担任を勇気付ける！

- ・4月から特別な支援を必要とする児童が在籍する学級を担当している先生の言葉。「対象児が好転しているのか、私の指導はこれでよいのか不安である。」
- ・管理職や特別支援教育コーディネーターによる授業参観や校内委員会での評価等、担任を全校で支える支援体制を構築する。担任が元気であれば子どもも元気になれる！

○子どもを勇気付ける！

- ・通級指導教室を利用している児童。視写、迷路等の指導の結果、書き方に変化が出てきた。保護者が「画数の多い漢字も覚えられるようになってきた。」と話すなど、子どもを肯定的に受け止められるようになった。それを本人の前で話してくれたので、子どもは嬉しそうにはにかんでいたとのこと。見方を変えれば子どもは化学反応を起こす。

発達障害のある子どもの学習支援 PART4

○ユニバーサルデザインの授業づくり 〈授業の「展開」のポイント その2〉

(4) 多様な学習活動を組み入れる (動と静のバランスが大切！)

- ・受け身活動(話を聞く・ノートに写す)が長いと覚醒レベルが下がり集中力を奪う。自発活動が長いと目的とズレが生じて勝手な行動が増える。

(5) 子どもが動ける具体的な指示を出す (曖昧な表現はすべてを曖昧にする)

- ・「主人公の気持ちが変わったのはどこですか。」
→「気持ちが変わったと思う一文をノートに書こう」「グループで相談しよう」
- ・抽象語を少なくする、肯定的な表現を心掛ける、大切なことは繰り返す、活動中は指示をしない・変えない、語調に変化をつける、前振りをしてから話す。
- ・「間」が子どもの緊張感と、考える必要性を高める。

(6) できる限り個の違いに応じる (個人差を考慮し、基礎と発展を明確に！)

- ・みんなで取り組む課題と早くできた子どもが取り組む発展課題を用意する。
- ・認知特性(視覚優位・聴覚優位)を考慮して、複数の指導方法や教材を用意する。